

旅・発達(二)

津 守 真

この夏、カナダのモントリオールで開かれた国際応用心理学会のシンポジウムに、「伝記と自伝の心理学」という部会があった。これは、だれの耳にも聞きなれないものであると思う。伝記も自伝も、ひとりの人の生涯の発達を扱うものであるという点で、これは発達心理学の一分野である。発達心理学は、乳幼児から児童・青年、さらに成人、老年に至るまでの人間の精神面の変化を問題とするが、現代の心理学は、人間を対象として見てもっぱら外から観察しうる側面に着目してきた。それに対して、伝記や自伝は、その人の内面に即して、人間を理解しようとする。その点で、伝記と自伝の心理学というのは、発達心理学における人間の認識の仕方そのものを問い直すような主張をふくんでいるように思われる。もちろん、これには、方法論上、多くの問題点をもっている。出版されている伝記や自伝を資料とすればよいというものではない。問題はもう少し根本的なところにある。発達心理

学の研究の初期に、発達研究の先駆をなしたものは、研究者に身近な子ども、日常生活の中での素朴な観察による研究であり、それらは伝記的研究とよばれたことは、よく知られたことである。その後、この種の研究がより組織的になされるようになり、かなりの人数の同一の子どもを、乳児期から、幼児、児童、青年期と長期にわたって研究する試みがとくに米国において、いくつも行われた。それらは縦断研究として知られているものであり、最近、三十年、四十年にわたる研究の成果が発表されつつある。これらの縦断研究の多くは、最近数十年間の科学的心理学の流れの中でなされたものであり、種々のテストや測定、外部よりの観察資料の相互関連を調べたものが多い。このような縦断は、一人の人の生涯のある側面を問題にしているわけであるが、その本人の側からみるならば、自分自身の变化の経過や、各発達の時点での意識、自分自身の中で成長と共に次第に明らかにされてゆく自

己の認識等々、外から見たのとは異った観点がある。このような内面的な資料をいかにして得ることができ、いかにして他人がそれを理解することができるか、また、それをもとにして人間の発達を理解することができるかというようなことは、伝記・自伝の心理学の課題といつてもよいであろう。

一言つけ加えておくが、こういうことを考えることは、幼児教育と無関係ではない。ひとつの幼児の行動を、外から見たところだけから理解するのか、そこに含まれている幼児の内面的体験の存在を前提としながら理解するのかというようなことは、具体的に大人がそこでどうするかという問題と関係してくる。また、幼児期のひとつのできごとは、長期にわたる人間の発達の全体の中で考えてゆくことであつて、隠れたりあらわれたりしながら複雑に変化してゆく人間の発達を、いろいろの角度から見てゆく仕方を学んではじめて、それは可能になってゆくのである。

前おきが長くなってしまったが、話をもとにもどそう。「伝記と自伝の心理学」のシンポジウムの研究報告の中から、いくつかを紹介してみたい。

最初の報告者は、米国のノースカロライナ大学のハロルド・マッカーディで、「伝記における、直線的、周期的、点的側面」という演題であつた。この題が示すように、彼の論文でおもしろい

点は、発達には、直線的、周期的、点的側面があるということの指摘である。

発達のみにみるというときには、できごとや資料を年代順、年齢順に並べるといふような時間的順序が、ある場合には明瞭に、ある場合には暗黙の前提となつてゐる。時間の直線上に、人の経験を並べてみるとはつきりしてゐることがある。たとえば、ある人の伝記や自伝の中で、何人の人々が登場するかを年齢順に整理してみると、実際に出会つてゐる人の数は年齢が進むにつれて急増するはずであるが、その人にとって意味のある人は、そんなに幾何級数的に増加するものではない。そこには個人差もあつて、直線時間にそつて分析するならば、そこに発見されることがあるはずである。これは一例である。第二に、多くの伝記をみると、行動や気分には周期的な変化があることが見いだされる。創造的な行為のあらわれる前には、無為の時期があり、それが季節などと関連のある場合もある。第三に、人の生涯の中には、二度と回復されない決定的な瞬間がある。そのあるものは予想されるが、多くのものは予期しないうきごとである。発達の直線的、周期的側面も、このような「点」から成り立つてゐるともいえる。マッカーディは、ここで、アウグスチヌスの自伝や、ジョン・デイヴィズ、ジョン・メイスフィールドの詩をとり上げ、いかに人生の中の

一つの点が重大な力をもつかを例証する。そして、フランク・ケンドンの「幼少期」を引用し、彼が幼いときに、牧場の草の中に見いだした、空の青に比せられるような青色の花が、この歓喜の単純な発見が、彼自身を変化させたということを語らせる。これはケンドン自身が、三十年後に至るまでも、何度もくりかえし思いつき出すことである。同様のことがワーズワースの詩の中にも述べられる。人間の生涯の発達を扱う心理学においては、このような時間をこえた点としての瞬間的時間を考えなければならぬ。以上はマッカーディの報告の要旨であって、彼がいままで幼児期の発達について観察してきたものと共通のことが伝記的資料によって示されており、私は大へん興味深く思った。

二番目の報告は、米国のスタンフォード大学のロバート・シアース氏による「マーク・トウエンの小説の逸話的内容分析」と題するものであった。ロバート・シアース氏は、最近の発達心理学の中で、親子関係とパーソナリティの発達の分野において、精神分析理論を学習理論の立場から、実証科学的に研究し、一つの研究の潮流を作った人である。私はかねてから、この人の研究には数多くふれて、学ぶところも多かったので、この種のシンポジウムでどのような報告をされるのか、興味をもってきいた。彼は親子

関係の研究で面接記録を分析すると同じ方法で、マーク・トウエンの小説を分析する。まず作品を生涯の年代順に並べ、各作品について、ひとまとまりの逸話単位ごとに分析し、それぞれについて、多数の特定のカテゴリーに従って評価し、集計するという方法をとる。もちろん、評価の信頼度など、注意深く検討されている。こういう方法で、マーク・トウエンの生涯の傾向を客観的、分析的に研究し、人間の発達の側面からこれを考えようとするのである。結果の一端について述べると、彼の生涯を通じて、愛情の喪失の恐怖、分離不安が、どの作品にも顕著な傾向であるという。一八六八年から一九〇四年にわたる期間、すなわち、マーク・トウエンが三十三歳から六十九歳にいたるまでの間に、このカテゴリーに関して三つのピークがある。一八七三年、トムソニーヤーの前半、夏の世界、一八八〇年、ハックルベリー・フィンの一部、一八九七年から一九〇四年の、ミステリアス・ストレインジャーである。各ピークの間作品は、分離不安のテーマはその半分以下である。シアースは、彼の分離不安の強い傾向の説明として、彼の幼少期に、母親との間に強い結びつきがありながら、それが気まぐれで断続的であったことを指摘する。そのような場合には、彼の親子関係の実証的研究によれば、たえず親の関心をひく過依存の子どもになるか、あるいは、不安をひき起こす

事態を避ける傾向を生ずる。マーク・トウエンの場合には、この後者であり、彼は三十四歳まで恋愛をしたこともなかった。そして彼の妻との関係は、ポリーおばさんとトムソーヤーの関係に比せられるものであった。彼らの間にできた最初の子どもは、十八ヵ月で死に、つづいて四年間に二人の女の子が生まれた。彼の作品の中で、分離不安が最高に達するのはこの期間である。そして三番目の子どもが生れてまもなく、第一の危機は通りすぎる。第二のピークは、思いがけず、第四子が生れることがわかったときであり、彼は妻から顧みられなくなったように感ずる。第三の時期には、彼の長女が死に、家族に病人が続出し、経済的にも困窮する。彼の手紙やその他の資料によって、この作品分析の妥当性をたしかめて、シアースは次のように述べる。彼は天才であったけれども、人間としては、幼少期から、作家生活の最後にいたるまで、深く悩みをもった人であった、そのことが作品の中にはかからずあらわれていると。私は、シアース氏の研究の内容もさることながら、彼が従来乳幼児の研究にとってきたのと同じ研究方法を、一人の人間の生涯を通じての発達の研究に應用していること、そのことがおもしろいと思った。

三番目の研究報告は、ドイツのボン大学のハンス・トーマイ氏による「文学と心理学の研究にみられる日常生活に関する研究報

告」と題するものであった。トーマイ教授は、一昨年、日本で国際心理学会が開かれた際に、やはり私が参加した発達のスインポジウムで一しょになった人であり、モントリオールで再び出会って、なつかしく思った。彼は、米国のバーカーが、子どもの行動を朝から晩まで、詳細に、正確に観察記録し、こまかい評価尺度によって分析した方法を、戦後のドイツの青少年に適用して研究してきた学者である。最近、青年、および老人にまで対象をひろげて、多人数について広く研究しており、今回もその研究報告であった。とくに、ある限られた場面や事柄についてではなく、日常生活の全体を研究しようと試みているところに彼の研究の特色がある。今回はまた、ジェームス・ジョイスのユリシーズにおける、一セールスマンの一日の行動の文学的叙述に言及していることは、興味深かった。

四番目の報告は、カナダのアルバータ大学の、ポール・シュワルツ氏の「マルセル・ブルーストと時間及び自己の問題」と題する難解なものであった。彼は、マルセル・ブルーストの作品にそって論を進める。彼によれば、心理的側面からみた人間の中心は、事物の隠された永続的な本質に対する感受性である。これが真の永続的な自己であり、それは人間の一生を通じて継続する。これに対して、もうひとつの自分は、たえず変化する感性であ

り、一時的な自分の連続である。真の自己の例証として、次のようなブルーストの少年時代のエピソードが述べられる。それは意図せずして想起された回想の古典的な事例である。時は冬の一日である。家に帰って、冷えきったマルセルは、母親からお茶をすすめられる。彼はほとんどそれを飲まないで、はじめはお茶を下におろす。それから、なぜかわからないが、それを受けいれる。母親は小さなスポンジケーキをすすめる。お茶に浸した小さなケーキの味が彼の心を動かす。それと共に彼の心の内部の奥底の何かがゆり動かされてとける。それは過ぎ去った瞬間と結びついた感覚の記憶であり、ブルーストはそれを意識にのせようとして格闘する。その時から三十年以上を経て、この時のことを思い起こそうとし、一たび壁が破れると、次から次へとさまざまな感覚がよみがえる。そして遠い過去と現在とが交錯して、いづれがいずれともわからなくなる。そこにあるものは時間をこえた何ものかである。習慣にしばられた特定の時のことではなく、永続的な自己の姿である。そこから、シュワルツ氏の考察が始まるのであるが、あまりにも多くの内容をもった論述を、ここで簡単に紹介することはできないことであるので、ここではこのくらいにしておく。

モントリオールMontrealの夏は、いままで晴れていたかと思うと、急に雨になり、さーと降る。外出するときはかさを離せない。学会の開かれていたホテルから、私の泊っていたホテルまでは、歩いて十分ばかりの距離である。途中に、緑の木におおわれた広場があり、そのわきに、観光用の馬車が何台もとまっている。そこを通り抜けると、じきに賑やかなショウウィンドウの並んだ通りに出る。雨が降っても、大勢の人がぞろぞろ歩いている。十二時から一時四十五分までの昼休みの間に、急いでホテルに帰って休憩をとる。私の友人の二、三の学者も、早く帰って休まないと、きょうは長い一日だからと、雨の中をめいめいのホテルに急ぐ。

午後のセッションは、ベルギーのブラッセル自由大学のポウル・オステルリウス教授の司会で始まった。オステルリウス氏は、児童画の研究者である。午後の部会は、午前ほど理論的な報告でなく、実際のなものが多かったので、簡略に紹介するにとどめよう。

午後の最初は、カナダ心理学会記録保管人のロージャー・マイアーズ氏による「口頭歴史資料の蒐集、保存および利用」と題する報告で、カナダ政府の後援によって、カナダにおける年輩の心理学者の、自伝的資料を蒐集するというプロジェクトについてであった。マイアーズ氏自身が百名の心理学者に面接し、二百時間に

及ぶテープ記録をとり、公的に保管する仕組みになっている。マイアーズ氏自身、ノンディレクティブの面接の専門家であり、心理学者として著名な人である。彼によれば、この種の資料は、語調を伝えたテープ記録そのものに価値がある。心理学者についてのみでなく、いろいろの分野に適用して価値のあるプロジェクトであると私は思った。第二の報告は、ベルギーのブラッセルの、ヴリージュ大学のドゥウィリー氏の「パーソナリティ評定における自伝の役割」と題するもので、パーソナリティテストのひとつとして、自伝は欠かせないものであること、技術的にそれをどのように処理するかということに関してであった。

第三の報告は、米國ボストンの、チャールス・デイリー氏による「自伝の実際的縮図化」と題するもので、普通の人の書いた長文の自伝を、その本質を保ったままで、短縮し、要約して示すことの可能性についてであった。

第四の報告は、カナダのオタワ大学の、ウェイク氏による「自伝—心理学的訓練としての価値」と題するもので、その内容のみならず、あちこちに散見する彼の感想に、私は興味をひかされたので、それらを少しく紹介しよう。

ウェイク教授はいう。彼は心理学者となったことを後悔したことはないし、むしろ、必要以上に誇りをもつてきたかもしれない

い。しかし、自分がこれまで見てきたことですべて快いことであったというならば、それは正確ない方ではないであらうと。そして、心理学者の二つのグループ、科学的心理学者と臨床家の間の無意味な葛藤に言及する。あるとき、彼とロージャー・マイヤー氏が、ある学会のシンポジウムに参加したとき、一方のグループの人々が、他方のグループの人々を個人的に攻撃をはじめたことがあった。その言辭は実にショックなものであり、長年の専門的努力を侮蔑し、他人のまじめな個人的努力を、偏見のためにもふみにじるようなものであった。それは思い出すだけでも苦痛な体験であり、今回の会合の静かなふん囲気からは、想像もできないようなものである。(ウェイク氏がこういふとき、私自身も、いくつかの同様の体験を思い起こし、心が重くなる)

ウェイク氏はさらにつづける。この間に、中間的な立場を占める心理学者が少なからずいた、すなわち、科学の重要性を信ずるが、厳密な科学的方法にかららない資料を排除することをせず、個人的な体験を、できるだけ科学的な方法によって探究することによって、人間について何らかを学ぼうとする人々である。こういう中間に立つ人は、臨床家に対しては科学的理性を守ろうとし、他の厳密な実験主義者に対しては、事例研究の重要性を強調することになるので、苦勞が多い。(こういうことをきくと、私

は、ただちに、保育の現場と研究者のことを考える。研究者が現場を離れたところでつくる研究によって現場を支配する傾向、また、現場が従来のご定した習慣に頼って研究者を排除しようとする傾向、いずれも、いたるところにみられることである。中間に立つことがどんなに大変なことか。しかし、現場に親しむ研究者、現場から研究を生み出す現場人が増すことが、保育を向上させてゆくのだと思う。私は、そのことが、現在の幼児教育の大きな課題だと思ふ。

ウェイク氏はさらにいう。今回のシンポジウムは、このような中間人が、その見解を報告する機会を提供するものである。そして、研究するに困難であるが、かくも豊かな内容をもった神秘的な人間の行動に、新たな研究をすすめる契機となることを望むものである。ウェイク氏が指摘するように、今回のこのシンポジウムは、生きた人間の科学としての心理学を模索するものとして、特色のあるものであったと思ふ。

ウェイク氏の研究の本論は、心理学専攻の学生の訓練法の一つとして、学生自身の自伝を用いることをめぐってのことであり、興味深いことがいろいろあるが、ここでは割愛することにする。

(つづく)

お茶の水女子大学幼児保育現職研究会 のおしらせ

幼児教育の現職者が保育の原理を研究するための定期研究会を開く予定ですので、希望の方は左の要項で申し込んでください。

- 一、昭和五十年四月より、週一回、定期的に開催する。
- 一、お茶の水女子大学の教官が担当する。
- 一、午後六時—八時とし、一年間継続する。
- 一、定員 六十名
- 一、資格 幼児保育の現職経験のある者、短大卒またはそれに準ずる者、一年間継続可能な者。
- 一、規則書ご希望の方は左のようにお申し込みください。

東京都文京区大塚二—一—(〒112)

お茶の水女子大学家政学部児童学科内 幼児教育研究室

現職研究会宛

氏名、生年月日、住所、現職を記し、二十円切手を同封して封書で申し込むこと。